

Harri Englund,

*From War to Peace on the
Mozambique-Malawi Borderland.*

Edinburgh: Edinburgh University Press, 2002,
xiii + 217pp.

ふなだ 船田 クラーセン さやか

はじめに

本書は、モザンビーク武力紛争末期から平和への移行期に立ち会った社会人類学者による「民族誌的研究書」である。著者エングルントは、この現地調査の後、1995年にマンチェスター大学で博士号を取得する。そして、1996年から97年にかけて元調査地を再訪し、まとめたのが本書である。現在著者は、ノルディック・アフリカ研究所（在スウェーデン・ウプサラ市）に所属し、「民主化後」のマラウィの政治風土に関する本を編集するなど、活発な研究活動を行っている。

本書の根幹は、紛争から平和への移行が、モザンビークとマラウィ国境地帯（Dedza-Angonia）に位置するシチマ（Chitima）村の住民間関係にいかなる影響を与えたのか、そこからいえることは何かという点を解明することにある。そのために使われる手法は、状況分析手法（extended-case method）であり、本書で取り上げられる登場人物（dramatis personae）は十数名にすぎない。

十名程度の人間同士の関係に「のみ」焦点を当てているという点で、本書を何万と存在する民族誌の単なる追加物や詳細記述に満ちた読み物と早合点されるかもしれない。あるいは、モザンビーク紛争の研究につきものであった「紛争原因」に関する論争に名乗りをあげる一地域事情報告と受け止められるかもしれない。もしくは、100万人が犠牲になり、

450万人が難民・避難民になったとされるモザンビーク紛争について、十数名の経験「だけ」に焦点を当てることでいえることはあるのか、という疑問を呈されるかもしれない。しかし、本書を読み進めるうちに、著者がそのような射程を遥かに越えたものを目指していること、そして、既存の言説や仮定に対して挑戦し、その脱構築化を試みていることが分かってくるであろう。その意味で、本書を単に民族誌としてのみ紹介することは不適切であり、本来は理論と実態の往復を試みた研究報告として紹介すべきであろう。評者が最初に「民族誌的研究書」とかぎ括弧をつけて記述したのはそのためである。

本書において著者は、「外部要因」、「内部要因」、「革命」、「反革命」、「近代化」、「伝統」といったモザンビーク紛争をめぐる主要な（しかし相対する）言説のみならず、紛争研究一般における「被害者」、「難民」、「ホスト」（受け入れ者）というカテゴリー、開発言説における「民主主義」、「グッドガバナンス」、社会理論における「エスニック」、「リネージ」、「コミュニティ」、「個人」、近年のアフリカ政治理論における「パトリモニアリズム」（家産制）、「ネオパトリモニアリズム」（新家産制）といった枠組みさえも射程に入れ、それぞれに特有の言説や前提を脱構築化しようと試みている。その意味で、本書はモザンビークや紛争の研究者だけでなく、幅広い読者に一読していただきたい一冊である。

したがって、本書の書評をすることは評者の力量を超えており、社会理論の専門家、あるいはアフリカ政治理論の専門家が読むと相当異なった印象を受けるかもしれない。自らの能力不足を切実に感じつつも、著者と同様（マラウィの西側ではなく東側という違いはあるが）、マラウィ国境に近いモザンビーク北部の元紛争地で和平移行期（1994年5月～12月）に立会い、その後歴史的経験の聞き取り調査を行ってきたという立場から、本書の書評を試みたいと思う。

まずは、モザンビーク紛争研究の先行研究において本書が占めうる位置を確認したうえで、本書の特徴を明らかにし、最後に評者が感じた若干の疑問を提示したい。

なお、本書の構成は以下のようになっている。

- 序
 第1章 引かれる国境，閉じられる国境
 第2章 戦争への道
 第3章 遠くからの難民
 第4章 ジェンダー化された亡命
 第5章 難民の中の移民
 第6章 帰還のパラドクス
 第7章 価値，権力，そして「社会資本」
 エピローグ 国境地帯再訪

先行研究における位置づけ

独立後のモザンビークにおける武力紛争 Frente Libertação de Independência de Moçambique(以下，FRELIMOと略す)政府とMozambique National Resistance/Resistência Nacional de Moçambique(以下，MNR/RENAMOと略す)による1977年から92年まで続いた武力対立 については、その主要因をめぐって様々な解釈がなされてきた。紛争勃発時から1980年代後半まで主流を占めたのは、「外部要因」説であり、この紛争は、長年の武装解放闘争を経て独立を勝ち取ったFRELIMOの社会主義的な国家建設に対する南部アフリカの白人政権、西側諸国、旧宗主国ポルトガル旧政権関係者(秘密警察や入植者など)による破壊あるいは不安定化工作として理解されていた。しかし、1980年代後半以降は、マルクス・レーニン主義を掲げ、急進的な社会主義(研究者によっては「近代化」と呼ぶ)政策を強制したFRELIMO政権こそが、農村住民のMNR/RENAMOへの協力を生み出したとする「内部要因」説が次第に主流を占めていった。1980年代末から90年代初頭にかけては、和平プロセスの展開とともに、これらの論者間で激しい論争が交わされた。その後、1994年に実施された初の複数政党制選挙で「外部要因」説によって外部介入者の「操り人形」とされていたRENAMOが善戦した(僅差でFRELIMOに敗れた)ことから、「モザンビーク内の地域社会は双方勢力といかなる関係を結んでいたのか」という地域の実態への関心が高まった。これ

に応えたのが、1992年の紛争終結後アクセスが容易となった紛争現場での調査を行った研究者らであった。1990年代半ばになると、これらの研究者による成果論文が数多く出版されるようになる。本書は、このようなモザンビーク紛争をめぐる先行研究の潮流の最下流に位置づけられる。

特定地域を対象とした紛争の実証的研究が数多く発表されるようになると、モザンビーク武力紛争の地域的多様性が豊富な資料とともに明らかになっていった。そして現在、「外部」から「内部」へ、国内から特定地域/エスニック集団へ、特定地域/エスニック集団から特定リネージ/クランへ、特定リネージ/クランから特定「伝統的権威」/年齢層へ、と移行してきた議論は、行き着くべきところへ行き着いたかの様相を帯びつつある。以上の紛争の多様性顕在化の一方、ある種の共通認識も生まれつつある。つまり、紛争勃発の要因としての「外部要因」の重要性を認識しつつも、やはり独立後のFRELIMO政権の政策こそが(場所によって問題とされる政策は、「共同村政策」であったり、「伝統的権威」の周縁化であったり、その指摘は多様ではあるが)問題であった、という認識である。

これに対して、本書は「名前のあるパーソン」同士の関係という新しい地平をモザンビーク紛争研究に持ち込み、その共通認識を問い直したという点で斬新であり、議論をさらに一步実態に近づけたといえる。本書の後に続くモザンビーク研究は、もはや「コミュニティ」、「難民」、「伝統的権威」といった用語を注釈なしに用いて論じることは困難となるであろう。その意味で、本書が膨大な先行研究の最下流に位置しながらも、先駆的な性格を有することは間違いない。

本書の特徴

本書の民族誌的記述は、2人の中心人物 シチマ村の「伝統的首長」(headman)ラファエロとその実弟であるFRELIMO書記長ルイス の関係を軸に展開される。序は、ラファエロがよこしたと考えられるRENAMOゲリラらが村を襲い、ルイスが

屈辱的な拷問を受けるエピソードで幕を開ける。その後、シチマ村がそもそもどのような経緯で形成され、なぜ兄弟が相対する紛争勢力と協力するのが明らかにされていく。その際、著者は、兄弟対立を単なる内的力関係の話に矮小化して話を終えるのではなく、この両者の関係を取り巻く国内、地域、国際、グローバルといった多様なレベルにおける政治変動とリンクさせた形での説明を試みている。つまり、植民地支配、国境線の取り決め、白人入植者の定着、南部アフリカ地域経済のあり方（出稼ぎの活発化と終焉）、ナショナリズム時代の到来、マラウイの独立、モザンビークの独立、FRELIMOによる社会主義政策の実施、RENAMOの地域への登場、国際機関の援助、和平合意、難民帰還、経済や政治の「自由化」、といった大状況の変化が、登場人物間の関係にどのような影響を与えたのかについて検討しているのである。

この過程で、読者は様々な言説や仮説が解体されていく現場に立ち会うことになる。たとえば、先に紹介した兄弟間の対立は一見モザンビーク紛争の「内部要因」説の主張どおりのシナリオに見える。つまり、独立後、FRELIMO書記長となったルイスによる周縁化に反発した「伝統的首長」ラファエロが、権威と尊厳そして伝統の回復のためにRENAMOと同盟を結んだという筋書きである。しかし、著者はこのような結論には与せず、むしろ、両者の対立が形成されていった状況と個別の歴史的経験の重要性を繰り返し強調している。そして、ラファエロとルイスの対立関係の背景として次の2点が紹介されている。つまり、(1)南アフリカの鉱山やマラウイの都市での生活経験を有したルイスが植民地解放闘争期にFRELIMOの活動家になったこと、(2)「伝統的首長」ラファエロが植民地行政の間接統治に利用され、植民地末期にルイスを植民地行政官に引き渡していたこと、である。植民地支配と脱植民地化という時代状況下で育まれたそれぞれの歴史的経験の差異とそこから生じた関係のあり様が、同じクラン、同じリネージ、同じエスニック集団、同じ村に属していたはずの2人の暴力的対立を招いたことが示唆されている。ちなみに、一部の「内部要因」説では、

クラン間対立がモザンビーク武力紛争の激化につながったという指摘もあるが、著者はより個人に注目し、このような「集団間対立」という構図を否定している。

さらに興味深い点は、本書では、「内部要因」説でよく描かれる構図「周縁化された「伝統的権威」に従ってRENAMOに協力する住民の姿」がまったく描かれていない点である。紛争期あるいは和平移行期において、ラファエロに連なる者もいれば反発する者もいたが、これらの行動は恒久的なものではなく状況的でありかつ歴史的背景を有するものであることが明示されている。本書には「地域住民」あるいは「コミュニティの成員」という言葉で一括りにされる人間の総体は登場せず、内外の状況変化の中で異なった歴史的経験を得ていくパーソン(person)間が結んでいく諸関係と、その結果としての行動の多様性に重点がおかれている。

和平後のFRELIMO政権は、「内部要因」説が提示し、現在定説化されつつある「住民 伝統的権威 RENAMO」という認識をもとに、モザンビーク全土で「伝統的権威」を地方政治の場に復権させる戦略を採択している。その結果、シチマでも、ラファエロは村長の地位に復帰する。同様の事態は評者の調査地（ニアサ州マウア郡）でも観察されている。この国政上の変化を受けて（これは、「国際社会」による「和解」の強要とも関わっているのだが）、再び避けがたい対立を繰り返すようになったのがシチマ村の兄と弟である。しかし、2人は村民から徴収した「税金」を山分けするという行為によって過去の歴史的対立を乗り越え、最終的に「和解」することになる。ここに、「内部要因」説が提示した「伝統的権威=住民の利益の代弁者」という姿を見ることは難しい。

著者が本書で試みたことは、ある特定の登場人物間関係の具体的な記述と背景説明を通じて、既存言説を脱構築化することにあった。著者は、モザンビーク紛争に関する先行研究の様々な前提を解体するだけでなく、エスニック、難民、国籍といった集団のカテゴリーへの帰属実態や意識がいかに状況的なものでありかつ、歴史的に培われる内的・外的諸

関係の中で形成されていくものであるかを、明らかにしたといえる。たとえば、難民というカテゴリーが外部者（援助ワーカー）らによる物資の供与という行為を通して「与えられる」ものであること、人々が状況にあわせて国籍や国境を選び取っているとの指摘は新鮮なものである。また、母系・父系という社会制度が絶対的あるいは固定的なものではなく、人々が状況に応じて使い分けたり、力点を置き換えているという示唆も重要であろう。

モザンビークとマラウィの国境地帯という、「世界の辺境」にあたると思われる地の十数名の人々の生が、西欧で誕生し普及してきた近代的学問の限界を浮き彫りにしているという点は興味深い。その意味で、著者はまさにマンチェスター学派に連なりつつもそれを乗り越えようとしているのかもしれない。

若干の疑問

多くの記述に共感する一方、本書を読み始めてから最後まで気にならざるを得ない点は記述の仕方についてである。これは、社会人類学や著者の用いる状況分析手法に明るくない評者の限界、あるいは本書が出版用に用意されたものであることによるのかもしれない。「トム、ディック、ハリー間の実質的な関係を問題にする」(p.28)という際、「トム、ディック、ハリー」がなぜどのような過程で何に基づいて選択されるのかという点は自明のこと、あるいはトムが誰であれ関係ないのかもしれないが、しかし、著者が本書で記述の軸に据えているのは、モザンビーク紛争研究においてまさに議論の対象となってきたFRELIMO書記長と「伝統的権威」間の対立である。

また、これらの登場人物間の関係を調査し記述するにあたって、著者がこの関係とどのような「関係」を有するのかについてはほとんど述べられない。実際、著者はこう述べている。

「本書において、私は『I-witnessing』という明らかに自己投影型の文化人類学者的記述にふけることはしない。と同時に 私はケース・スタディー

内のディレンマやコンフリクトについて調査していたとき、壁の上の八エなどではなかった。しかし、私自身のパーソンはケース・スタディーにおいて可視的な役割を果たさなかった。それは、これらのディレンマやコンフリクトの多くが起こったのは、私に関わる以前のことであり、私がこれらについて実質的なインパクトを与えたとは主張できないという単純な理由からである」(pp.31-32)

しかし、著者が個々のパーソン間関係について記述するとき、その記述の元になる資料はいつどのような形で収集されたのであろうか。そして、これらの資料は何をもってどのように分析され、選択され、解釈され、その結果として我々の前に提示されているのであろうか。残念ながら、これを跡付ける具体的な作業は本書の本文においても文末注においても共有されてはいない。著者は続ける。

「もちろん、私は他の人々よりある人々とより親しくなったが、それぞれの新しい発話者もまた私の視野を広げた。たとえば、登場人物の中で私が最初に会ったのはナソウェカ、つまりFRELIMO書記長であるルイスの妻の1人であった。我々の出会いは偶然によるものであった。私はすぐに彼女の兄弟達、そして後にルイスなどのこのケース・スタディーに出てくる登場人物を自分の最も親しい友人のサークルに入れた」(p.32)

それが何についての調査であれ、調査地での調査者のまわりには何らかの人間関係が生じ、調査者がいかに「部外者」であることに努め（著者の場合、調査対象の村に寝泊りしないという配慮が行われたという）、そしてバランスよく調査しバランスよく記述することに努めたところで（それが本書の意図ではないとしても）、限界はつきものである。重要な点は、自身の限界をどう認識し、それでも記述する意義をどこに求めるか、という点であろう。この部分は、評者自身が悩み、現在でも乗り越えられていない問題であり、このようなことを熟知したうえで本書を完成させた著者には見当違いの余計なお世話かもしれない。しかし、本書が従来のような仮説や言説を脱構築化しようと試み、それにある程度

成功しているがゆえに、その根拠を明示しきれていないという点は残念に感じる。

もう一点疑問に感じる点は本書の読後感である。本書は、大状況（紛争と難民化、そして和平）がこれらの登場人物間の関係に及ぼす影響とそのメカニズムを明らかにしようとし、結論としてこの諸関係をパトリモニアルな関係内での社会資本として説明している。しかし、このまとめに対して評者は少なからず違和感を覚えざるを得ない。

過去においても現代においてもモザンビークの最も「辺境」に位置するこの地域の人々は近年ますます「周縁化」されているという（pp.182-184）。著者は紛争や難民化という歴史的経験の中での人々の関係に焦点を当てたわけであるが、これらの登場人物が大状況の変化に影響を及ぼしうる可能性はほとんど提示されていない。「名前のあるパーソン」はあくまでも諸関係の末端に位置する人々として、一方的に既存権力構造の影響を受けているかのように描かれているのだが、これらの人々は変革主体としての可能性をまったく有していないのだろうか。

1960年の「アフリカの年」から40年以上が経過し、アフリカの人々をアフリカ内だけでなく、国際政治の変革主体としてとらえる見方は下火となっている。かつて、一世を風靡したアフリカ・ナショナリスト的言説も、もはや解体されつくしたかのようである。しかし、ナショナリスト史をジェンダーという視角をもって脱構築化したアフリカ人女性研究者らは、国立民族学博物館で開催（2002年秋）された国際シ

ンポジウム「女性／ジェンダーの視点からのアフリカ史再考」において、外国人研究者によるナショナリスト史への徹底批判に対しては、「創らないと壊せない！」と叫ばざるを得なかった。解体のための解体ではなく、創造のための解体であってほしい、という当事者らの切実な想いの一端に触れる気がした。この点は外国人研究者にすぎない我々が気を付けなくてはならない点であろう。

21世紀に入った今、アフリカ地域の世界的な地位は底辺にまで落ち、アフリカの人々が世界経済や政治の中枢に対して何らかの変化を及ぼしうるなどとは誰も考えない時代が到来している。国際会議等で北側諸国首脳と対等に話しているかに見えるアフリカ諸国のエリートらも、中枢部の変化への影響力は有していない。ましてや、アフリカの一般の人々の影響たるや皆無に等しい。しかしだからといって、我々は一方的な大状況の変動の下、「たくましく生きる人々」の姿を記述するに留まって良いのだろうか。アフリカに住む人々の切実な声や姿を外部者にすぎない我々はどのような関係の中で、どのように記述することが可能であろうか。言説への挑戦の先にある目的は何だろうか。本書はそんなことを考えさせる刺激に満ちた一冊であった。

本書には、他にも様々な興味深い記述や議論が提示されているが、評者の力量の限界と紙幅の関係上、それらすべてを紹介することはできなかった。残念であるが、是非ご一読いただけたらと思う。

（東京外国語大学外国語学部講師）